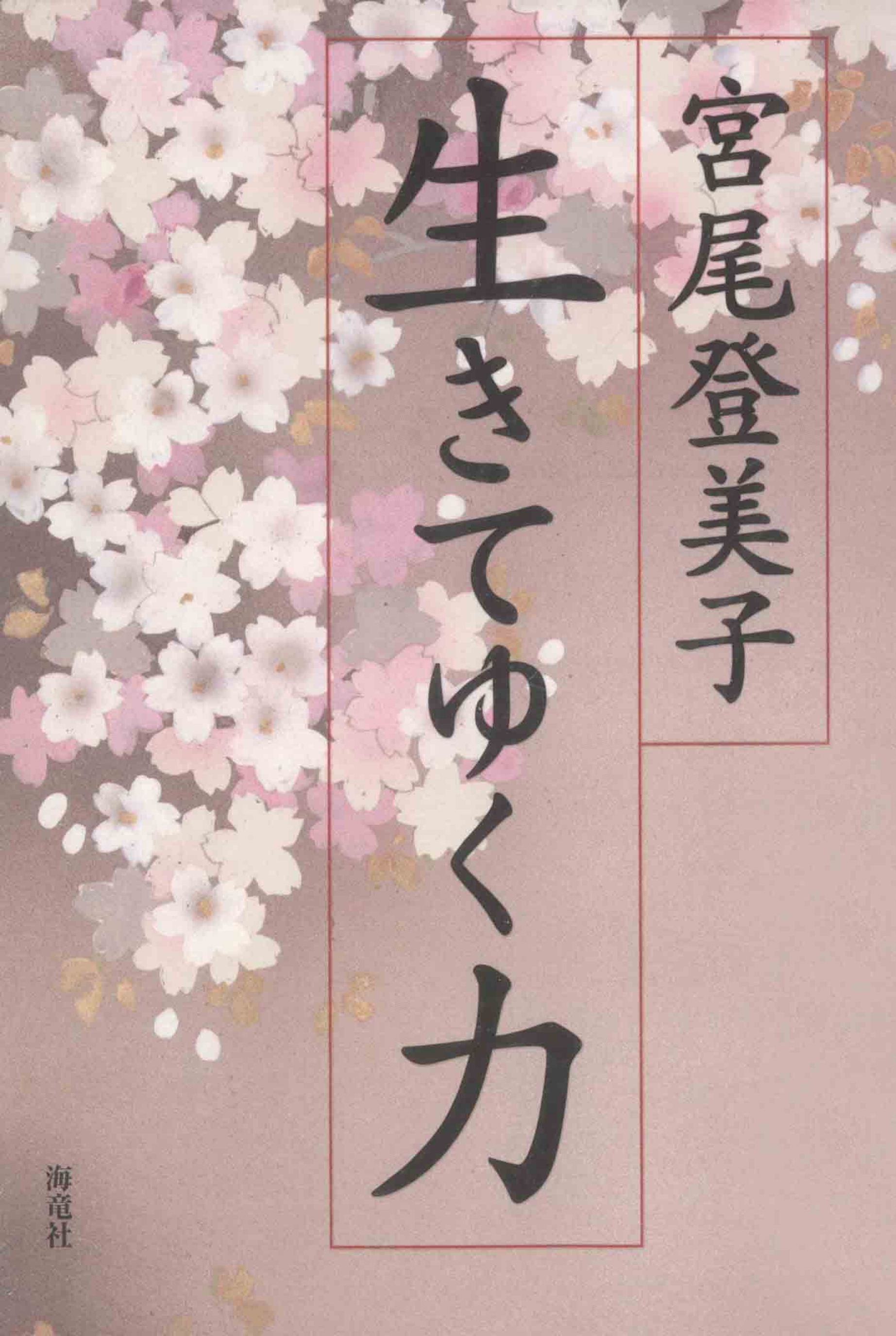

生きてゆく力

宮尾登美子

海竜社

生きてゆく力

宮尾登美子

海竜社

［著者紹介］宮尾登美子（みやお　とみこ）
1926年、高知市生まれ。高坂高女卒。62年、『連』で女流新人賞を受賞し、以後、72年、『櫂』で太宰治賞、『寒椿』（77年）で女流文学賞、『一絃の琴』（79年）で直木賞、『序の舞』（82年）で吉川英治文学賞、『松風の家』（89年）で文藝春秋読者賞を受賞する。同年、紫綬褒章、2008年、菊池寛賞を受賞。ほかに『鬼龍院花子の生涯』『天璋院篤姫』『朱夏』『春燈』『クレオパトラ』『宮尾本　平家物語』（全4巻）『錦』など多数がある。

生きてゆく力

二〇〇九年六月　十七日　第一刷発行
二〇〇九年六月二十九日　第三刷発行

著者＝宮尾登美子（みやおとみこ）

発行者＝下村のぶ子

発行所＝株式会社　海竜社
東京都中央区築地二の十一の二十六　〒一〇四―〇〇四五
電　話　東京（〇三）三五四二―九六七一（代表）
ＦＡＸ　（〇三）三五四一―五四八四
郵便振替口座＝〇〇一一〇―九―四四八八六
出版案内　http://www.kairyusha.co.jp

電算写植＝株式会社盈進社

印刷＝半七写真印刷工業株式会社

製本＝大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえします
©2009, Tomiko Miyao, Printed in Japan

ISBN978-4-7593-1075-7

まえがき——忘れないために

ここ百年ほどのあいだ、私たちを取巻く世界の変革は、目まぐるしいほどの速度で移り変わっています。しっかりと見つめていなければ何も彼(か)も忘れ去られ、歴史のはざまに埋没してしまうのは、いまを生きる人間たちが誰しも感じるくやしさでしょう。

思い起こしてみれば、そのときどきの出来ごと、かたち、お互いの関わり、或(あ)るいは些細な日常性までも、結構な拠りどころとなって私たちを支えてくれたものと判(わか)ります。

いま、目の前を過ぎゆくもの、過去となりつつあるものを、いとしみながら書き残しておくことも決して無意味ではない、と思いはじめたのも、これはトシのせいばかりではないのではないでしょうか。

ひょっとしてまた、私たちがすでに経験したこれらの世界や文化に、ふたたびめぐり合う日がやってくるかもしれません。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

そのとき、いま書き残したものは、自分だけが持つ貴重なデータなのです。このデータを踏まえて新しい展開が得られるとしたらうれしいことでしょう。内容は、一章ずつ材料を取上げてみました。

ころは昭和初年から太平洋戦争まで。場所は高知なので、言葉や暮らし、旅の話、人との争い、病気など、目にふれるものを無差別に思い出してみましたが、いまの若い方には多少の異和感があるかもしれません。

お読み頂いて、ほんの少しでもお役に立てば望外のしあわせです。

平成二十一年五月

庭はうす紫の栴檀（せんだん）の花の盛りです

宮尾登美子

目次

まえがき……1

一章・命がけの貧しさと人情

赤貧の裏長屋を抱えた町で……12
下町の人情と、かりそめの家族……17
実年齢はいくつだったのか……22
継子（ままこ）であろうと、継親であろうと……27
亀さんの二度の号泣……32
裾（すそ）をからげて駕籠（かご）の伴走……37
声をかけても知らん顔の「ねえちゃん」……42
肺結核に取られた親友……47
代参のありがたさ……52

二章・運命を受け入れる

姉妹のように育った「仕込みっ子」たち……58
桜の木の下で初対面の儀式……63
身代金の差額にプライドと生甲斐(いきがい)……68
自分を売った親のためにお金を貯(た)める……73
「何もかも一人でしたよ。一人でがんばってやったよ」……78
素人の世界へ脱出できた子……83
苦界を流されつづけた子……88
父といっしょに消えたナチ……93
ドリの犬小屋の前で泣いた日……98

三章・人生の豊かさと出会い

出会いの綱目……104
そちらで契り、こちらで縺(もつ)れて……107
苦労を血肉にする生きかた……111
女の底力、居なおる勇気……114
男女の仲は「玄人(くろうと)の底惚れ」がいい……117
絆とは愛そのもの……120

四章・小説と家事の深い関係

満州生活の異常体験を書き残す……126
文章は職人芸……131
自称「車輪」、やみくもに廻り続ける……134
自由な精神と主婦的思考の相剋(そうこく)……138
家事は頭を空白にする時間……142
生きたいと願う気持があれば……146
のどかな時間をたのしむ……150
野菜拝跪(はいき)の思いは人一倍……153

五章・食べものの記憶

初めての苺ミルクの美味(おい)しさ……158
そうめんの食べかたはガンコな保守派……163
温突(オンドル)で煮たじゃがいも……168
難民収容所の高粱粥(コーリャンがゆ)……173
飴湯(あめゆ)、椎(しい)の実、とれとれの魚……178
初物にそわそわ、楊梅(やまもも)の実……183
リヤカーで野菜を売りに……189
焚(た)いても固まらない我が家の砂糖……194

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

六章・失われたものへの愛着

薫風（くんぷう）素肌に心地よい季節には下駄（げた）……200
歯替え、打ち直しでくり返し使う……205
質種（しちぐさ）に消えた着物、残った大島……210
手旗で歓迎、「フ、ォウド」の栄光……214
釣好きの父の櫓舟（ろぶね）と動力船……219
お手玉、まりつきの数え唄……224
禁忌がいっぱいだった正月のしきたり……229

装幀――勝井三雄
装画――宇野千代きもの

一章・

命がけの貧しさと人情

赤貧の裏長屋を抱えた町で

貧乏、という言葉は、いまでこそ口にすることが少なくなったが、昭和初年の経済恐慌のころは、命がけのひびきを持った言葉だったといえると思う。

私がもの心ついたころ、父の職業は「芸妓娼妓紹介業」という、女子を妓楼(ぎろう)にあっせんする仕事だった。

家の職業のため、私がどれだけ苦しんだか、父への怨(うら)みと憤りのために作家を志したようなもので、げんに拙著『櫂(かい)』、『春燈(しゅんとう)』などにはその怒りをぶちまけてある。

しかし父逝いてすでに五十年余り、世も移り、価値観も変わってみれば、私自身のものの見かたも少しばかり冷静になって来たかという感はある。

考えてみれば戦前、女が身売りをするのは決して伊達や酔興でなく、親兄弟一家眷族を救うための、ギリギリの選択手段だった。

私の生まれた高知市緑町の裏側には、その日の米代にも困る人たちが住む棟割長屋が広がっており、その戸数、百軒はあっただろうか。

いま、景気は低迷しているが、このころの不景気はこんなものではなく、働こうにも職はなく、飢えをしのぐには壁をこわし、その壁土の中に塗り込んである土だらけの藁の切れっぱしを食べた人もあるという。

当然、疫病にもやられ、猛威をふるったかのスペイン風邪で、長屋からは毎日のように棺が連なって出たという話も聞いた。

むろん自殺者も少なくなく、誰もやり手のないこの地区の町内会長を進んで引き受けた父におぶわれ、一日、縊死者の家の前まで行った私はそのとき六つ。固く目をつぶっていたはずなのに、何故か、ぶら下がっていた二本の足がいまも瞼に灼きついて離れない。

こういう状況のなかでは、一家に女の子がいれば唯一の救いとなり、親子別れ

のつらさよりも一家全員、今日の命の保証があるほうを選択したことは容易に判(わか)る。無学な父が、この仕事を「親孝行の手助け」と信じ、となり町から裏長屋を抱えた緑町へと引っ越して来たことも、いまは理解できなくもない。

当時の福祉行政はまだまだ貧しいものだったし、身を挺(てい)して一家を助ける女の子は町内のほめられ者となり、泣きながらも、

「私ひとり、これからは三度のお飯(まんま)が食べられることになって、みんなに申しわけない」

と、かえって残る家族を気づかったという、せつない話もある。

赤貧洗うが如(ごと)し、の言葉の意味は、何も彼(か)も洗い流したように一物も無いこと、とあるが、たしかに裏長屋の人たちの暮らしは、一間きりの部屋のなかには何もありはしなかった。

そして売るべき女の子を持たない人たちは、いったいどんな暮らしをしていたかといえば、それは元手のいらない商いであったらしい。

即(すなわ)ち、川に入ってしじみ、あさり、川底に這(は)う青海苔(あおのり)を採る人、また田圃(たんぼ)に入

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c